

各水試発トピックス

佐野主査 (稚内水試) 「道総研理事長賞」受賞！ 鈴木研究職員 (稚内水試) 「水産海洋学会若手優秀講演賞」受賞！

佐野主査「道総研理事長賞」

平成28年10月に札幌市で開催された「平成28年度北海道立総合研究機構職員表彰」において、佐野稔主査が「マナマコ等の漁業資源の資源管理、生理生態に関する研究」により「道総研理事長賞」を受賞しました。この賞は北海道の産業開発や道民生活の向上に特に貢献した研究・発見を行った職員等に対して授与されるものです。

佐野主査は漁業者団体、民間企業、大学などの幅広い力を結集した研究チームのリーダーとして、最新のICT技術を用いて漁業者の自主的な取り組みを支援する「マナマコ資源管理支援システム」(図)を開発し、その成果を「マナマコ資源管理ガイドライン」としてとりまとめ、広く普及に努めてきました。

今回の受賞では、これらの成果がそのまま漁業現場で実用化されており、資源の回復を通して本道水産業の振興に貢献したことが評価されました。現在、佐野主査はマナマコ以外の漁業においても最新技術を用いた資源管理支援システムの開発を推進しており、今後さらなる活躍が期待されます。

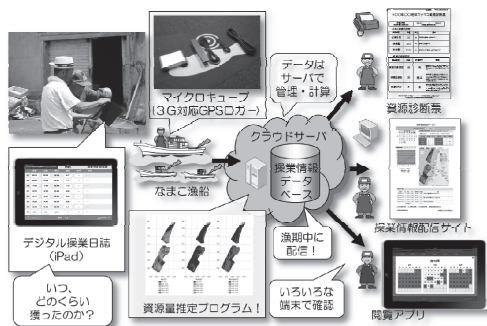


図 マナマコ資源管理支援システムの概要

鈴木研究職員「水産海洋学会若手優秀講演賞」

平成28年11月に東京都で開催された水産海洋学会研究発表大会において、鈴木祐太郎研究職員が「北海道沖日本海で採集されたホッケ仔稚魚の成長の年変動と水温の関係」について講演を行い、若手優秀講演賞を受賞しました。

北海道の重要水産資源であるホッケは近年漁獲量が急減していますが、漁獲加入前の生態に関する知見が乏しいため、資源動向を左右する加入量の変動機構はいまだ解明されていません。このため、水産試験場では、加入量予測技術の開発と実効性の高い資源管理手法の提案を目的として、鈴木研究職員を中心としたグループがホッケの調査研究に精力的に取り組んでいます。

今回の受賞では、加入量変動に影響している可能性がある仔稚魚期の成長と海洋環境の関係について、重要な知見を得たことが科学的に高く評価されました。ホッケの研究グループでは、このほかにも多くの成果を重ねつつあり、それらの活用によってホッケ資源の持続的利用が実現することを願っています。

(美坂 正 稚内水試調査研究部)



写真 若手優秀講演賞を受賞した鈴木研究職員

各水試発トピックス

宮本主査（道東センター）が「全国水産試験場長会会長賞」受賞!!

平成28年11月17日に山梨県甲府市で、平成28年度全国水産試験場長会全国大会が開催され、本年度の会長賞に道東センターの宮本主査が会長賞を受賞し、「TOM型浮上槽（自然浮上型魚卵収容人工ふ化育成槽）の開発および普及」と題して受賞講演が行われました。

当該ふ化槽の開発にあたって、順風満帆に事が運んだかというところとは問屋が卸さず、常に試行錯誤の連続で、その開発秘話として、開発途上のふ化槽が水圧で膨らんだり、下網が浮き上がったり、ふ化仔魚が流出したりと色々と大変だったようです。でも、それら問題を一つ一つ解決しながら、新型浮上槽として完成させ、今日の表彰と相成った次第です。開発までの時間も、新しいふ化施設建設計画に際して、当該開発予定（この時点ではあくまで予定）の浮上槽採用が確定していたこともあり、突貫工事で事が進められ、実験規模、事業規模試験も含め、正味2年弱という非常に短いもので、火事場の馬鹿力ではありませんが、人間、危急に立たされたときに、通常では考えられない力を発揮した良い例かもしれません。開発に際した経緯等背景を簡単にお話します。

一般に、サケ稚魚のふ化放流事業においては、健康な種苗を生産することが重要です。そのためには、稚魚として泳ぎ出す前の栄養の袋（さいのう）を抱えた「仔魚」の時期に余計な運動をさせないように音や光等を遮断する必要があります。北海道では、仔魚の管理は一般的に養魚池で行っていましたが、広大な面積の養魚池を遮光して真っ暗な状態にしなければならず、そうすると、暗い

状態では仔魚の健康状態を把握できず、寄生虫感染症への対処が困難な状況でした。そんな時期に、新しいふ化施設建設計画が浮上し、養魚池に代わる新たな仔魚管理システムの開発が半ば強制的に求められたことが背景として挙げられます。

そこで、東北地方で普及している浮上槽の(1)省スペース、(2)低コスト、(3)管理の容易さ、に着目し、これらのブラッシュアップとさらに原虫寄生にも対処できるよう改良を加えることを目的に平成18年から開発に取り組み、サケの卵が手に入らない時期には、吸水性ポリマーを原料とするバブルジェリーを卵に見立てて水流の確認を行ったりしました。その結果、従来型の浮上槽よりもさらにコンパクトで、使用する水量も少なく、収容密度も高い新たな浮上槽が開発されました（試験研究は今 NO.663参照）。この新型浮上槽は開発関係者のイニシャルを取ってTOM型浮上槽と名付けられ、現在、北海道のサケ増殖施設の約3割、放流数で約2割がこのTOM型浮上槽によって生産されています。また、広く本州（岩手県・秋田県）にも導入・普及が進んでいます。

（小林美樹 さげます内水試験場長）



写真 賞状を授与される宮本主査